

# 北日本新聞

2020年(令和2年)  
3月17日  
火曜日

県立高校一般入試2日目の

3月6日。2021年度末に閉校する高岡西高校の周辺は、静けさに包まれていた。

県立高の再編統合に伴い、本年度から新入生の募集を停止。新型コロナウイルスの感染拡大防止を目的とした休校も重なり、生徒の姿はほとんどない。

東京五輪まで約4カ月。中国・武漢市に端を発した新型コロナウイルスの脅威は、国内のスポーツイベントの開催に暗い影を落としている。3月中旬に開幕する予定だった全国高校選抜大会は全て中止が決まった。

「大会に出場することだけが全てではない。しかし、頑張ってきた生徒の気持ちを思えば試合をさせてやりたいかった」。出場権を得ていた女子ソフトテニス部の監督を務め

## 逆境こそチャンスに

### 第4章 青春をカケル

#### 1 コロナショック

22

## デポルタレの扉

DEPORTARE

小峯秋二教諭(44)は話す。同部は09年から全日本高校選抜大会に連続出場し、5年前には準優勝も経験した強豪だ。

ダブルス3試合で競われる



自宅の近所をランニングする上田さん(高岡市内)

選抜大会のソフトテニス団体戦は、1、2年生を合わせ6人以上の選手が必要だ。高岡西女子ソフトテニス部は1年生と2年生が4人ずつ。募集停止に伴って新入部員が見込めない同部にとって、今年は

「高岡西」として単独出場できる最後の選抜大会だった。

2年生の一人、上田莉理華さんは2日、会員制交流サイト(SNS)で大会中止を知った。「感染の広がりを見ると仕方ない。でも、やっぱり悲しかった」。休校から2週間がたつ。体力を維持しようとして、ランニングをしたり、部のトレーナーから送られてきたトレーニングのメニューを繰り返したりしている。

選手たちの心中をおもんばかった上で、あえて小峯さんは言う。「どんな環境でも自分を成長させることが大切。時間に余裕がある今こそ、普

段できない練習をすべき」

小峯さんは東京都出身。ソフトテニス男子ナショナルチームの一員として活躍し、1999年に富山に移り住んだ。現役引退後の2006年に県教員として高岡西に着任。以来、経験に基づいた独自のテニス理論で全日本シנגルス優勝の徳川愛実(ヨネックス)らを育て上げた。

実は、小峯さんが選抜大会の中止を経験したのはこれが2度目だ。前は東日本大震災が起きた11年。「優勝を狙えるチームだったという。そして今回のメンバーにもひそかに期待していた。「残念な思いは私にもある。でも、選手

にとつてこはあくまでも通過点。先を見据え、ピンチをチャンスに変えてほしい」4月には県春季大会、6月にはインターハイ県予選が控える。先のない状況に歯がゆさを感じつつも「悲しんでばかりはられない」と上田さん。晴れて部活動を再開できる日を心待ちにしながら、黙々と体力づくりに励む。

少子化や教員の働き方改革の影響で、学校でスポーツをする環境は変わりつつある。スポーツに打ち込む県内外の中高生とそれを支える人々の姿から、課題や競技力向上のヒントを探った。

#### 「デポルタレ」

スポーツの語源とされるラテン語。仕事や家事から解放される「気晴らし」「遊び」を指す。